

2021年10月17日 主日礼拝

説教題「キリストに沈められて」ローマの信徒への手紙 6章 1～4節

主任牧師 加藤 誠

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるためにバプテスマを受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるためにバプテスマを受けたことを。」(ローマ6章3節)

「神を信じる」とはどういうことでしょうか。具体的にそれは「祈ること」を学んで身に着けていくことです。見えない神さま。いるのかいないのか、わからない神さま。けれど、イエス・キリストを通して私たちはその神さまが「愛なる神」であることを知らされた。その「愛なる神」さまに「祈り」、「つながり」、日々を生きる。それが「神を信じる」ことです。私たちの社会では例えばお金を持つこと、大きな家に住むこと、社会的な肩書や力を持つことが「良い暮らし」を支える力として大切にされます。それに比べて「祈る」ことはほんとうに小さな力にすぎないように思えます。けれど「祈り」に秘められた大きな力、「見えない神さまとのつながり」からいただく力を大切に受け取って歩む。そこに「信仰」があります。

「ミャンマーを覚える祈り会」という小さな祈り会があります。今年2月1日に国軍がクーデターを起こして以来、毎週金曜日の夜、40分間、オンラインで80人から100人ほどの人たちがつながって、ミャンマーで日々起こっている報告を直接聴き、祈りを合わせます。ほんとうに小さな集まりです。国軍が持っているパワーに比べたら何と小さな力でしょうか。けれどもその小さな祈りからすべては始まる。神さまの働きは始まる。そのことに信頼して集まります。アブラハムは「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて信じ」ました。(ローマ4・18)。

「死者に命を与え、無から有を呼び出される神」を信じたのです。死んだらすべてが終わり、すべての望みが断たれる。私たちにとって死は決定的です。しかしその死に命を生み出される神がおられる。神は無から有を、絶望の中に希望を起こされる。イエス・キリストの十字架と復活において、確かにあらわされた神さまの命、神さまの愛の力。その神さまの命と愛につながり「祈る」。とにかく「祈り」から始める。そこにクリスチャンの歩みが形づくられていきます。

クリスチャンでない方に新しい礼拝堂をご案内した時に、皆さんが大きく反応されるのがバプテストリーです。ある教会員が友人を案内した時に「わたしの罪はゴシゴシ洗ってもちょっとやそつとでは簡単に落ちないわ」と言われたとか。確かにバプテスマは「罪を洗い清める儀式」と理解されていることが多いようです。私たちは神さまの前にふさわしくない罪がたくさんこびりついて、その罪の汚れは主イエスの十字架によって清く真っ白にされるのだと。けれども私たちの罪というのは、もし真っ白に清められたとしても、残念ながらその日のうちにまた汚れてしまうもの。そうすると毎日バプテスマが必要になります。実際、主イエスの時代、エッセネ派という人々は毎朝罪のケガレを洗い清めるバプテスマを受けたそうです。

それに対して、使徒パウロはバプテスマのことを「キリスト・イエスの死へとバ

プテスマされる（沈められる）」と表現しています（ローマ6・3岩波訳参照）。つまりバプテスマとは全身をキリストの死へと沈められ、キリストと共に復活の命に生かされること。同じくガラテヤ3・26～27（岩波訳）では「キリストへとバプテスマを受けたあなたがたは、キリストを着て、神の子とされた」とも表現しています。

私たちは心の根っこから「神に背を向けた存在」です。神の語りかけに耳をふさぎ、自分の好きなように生きたいと神に背を向け、さまざまな悲しみや痛みを自分の周りに毎日創り出して、死の絶望に向かって生きている者です。けれどもそのような者が、キリストの死へとバプテスマされ（浴槽の水の中にすっぽりと沈められて「死ぬ」）、罪にまみれた者が神さまの復活の力によって起こされ、新しい命に生きる者とされる。私たちは心の根っこから罪に染まっている人間だけど、キリストにあらわされた神の愛と赦しを「服を着るように」すっぽりと着る。それは一度キリのバプテスマ。キリストの十字架が一度キリで完結したように、バプテスマも一度で十分。何度も死ぬ必要はない。そして、私たちをどんな時も「愛する子よ」と親しく呼びかけてくださる神さまの声を聴きながら、神さまの愛につながり、今、自分にできる精一杯の応答をささげていく。それは、どれほど拙く未熟な者をも、どんな時にも、「あなたはわたしのもの！」と呼んでくださる方の愛に信頼し、自分を委ねて歩む、希望に向かう歩みなのです。

こんなたとえ話があります。ある人が天国に行って、いろいろと案内してもらいました。すると一軒の小屋があり、その中には宅配便の荷物が山と積まれました。見ると、自分宛の荷物もあります。「どうしてわたし宛ての荷物がここにあるのですか？」と尋ねると「あなた宛てに一度は配達されたのですが、受取人不在で戻って来たのです。配達員は不在通知も置いていったのですが、連絡がなかったようです」と言われ、その人は赤面して下を向いたと。

このたとえ話は、私たちと神さまとの関係を見事に描いていると思います。私たちはお願いごとがある時には必死になって神さまに祈るけれど、それ以外の時は神さまのことを忘れている。神さまがせっかく送ってくださる贈り物やメッセージに対しては、不在にしたままで連絡もせず、時には受け取り拒否さえして、神さまからの大切な荷物を受け取ろうとしない。どうして私たちは神さまからの大切なメッセージを受け取ろうとしないのか。「わたしはもう間に合っています。別に神さまの手助けなど要りません」と思っているから？ 「いろいろ忙しくて、宅配便の受け取りのためにわざわざ時間を取るなどできない」から？ それとも「神さまからの贈り物はすばらしいと分かっているけれど、自分には受け取る資格などないから」と思っているから？ しのごの理由を並べる私たちに、それでも神さまは愛をもって今日もイエス・キリストを遣わし、大切な命の言葉を届けてくださいます。今日という日に、その神さまの招きに応答して、神さまの喜びの招きにあずかり、祈りでつながる歩みをささげていきたいのです。